

令和２年度第２回生物多様性保全検討部会

【 摘 録 】

日 時：令和２年９月９日 午後２時～４時

場 所：職員会館かもがわ 第１会議室

出席者：①足立直樹委員，②池本優香委員，③石原正恵委員，④板倉豊委員，⑤落合雪野委員，
⑥田中正之委員，⑦久山喜久雄委員，⑧伏見康司委員，⑨森本幸裕委員，⑩湯本貴和部会長

議 題：次期「生物多様性プラン」の策定について

- (1) 次期プランの策定スケジュール
- (2) 次期プラン（素案）について
- (3) 次期プランの評価方法について

<開会>

議題(1) 次期プランの策定スケジュールについて

議題(2) 次期プラン（素案）について

事 務 局 <資料１，２に基づき説明>

湯本部会長 この部会の最終的な目的は次期プランを完成させることである。次期プランの策定に向けた答申案を完成させて環境審議会に提出することが私たちの部会のミッションであり，最終的には環境審議会の委員意見も反映させ，答申が完成する。

それでは，議題に入る前に，いくつか委員から提案があるので，紹介させていただく。

足立委員 マツタケが絶滅危惧種になったことは本当に非常に深刻なことである。量的にいうと，日本での生産は戦前と比べて１％となっている。マツタケがそんなに減ってしまった理由は，食べ過ぎではなく，松林の管理が昔のようにできていない，つまり人間が山に入らなくなったためである。それ以外にもアユモドキが絶滅危惧種になった。このままではとんでもないことになる。是非，市民や事業者に伝えていただきたいし，私たち自身もその覚悟を持ってやらなければならない。国際的には，生物多様性喪失の流れを２０３０年までに逆行させなければ，企業活動が続かないという意識があるが，おそらく日本ではこうした危機感は全然ない。

次期プランでは，文化，事業を継続させるために，どのように生物資源を担保していくかということに踏み込まなければならない。具体的に何をしていくかということ，文化，事業のためにどういった生物資源が必要なのか，明らかにしなければならない。例えば，チマキザサについて本当はどういう状況なのか。おそらく聞かれても誰も分からないと思う。また，分からない前に，どうにかしようとして，どうにかなるものなのかどうか。２０３０年，最終的にどこまでの状態にできたら，私たちが目標を達成できたと言えるのか。それぐらい，きちんとした目標を設定しなければならないのではないか。今，生物多様性を守るための瀬戸際にあるので，この１０年でどこまで戻すのか，是非具体的に明らかにしていきたい。全て調べる訳にはいかないと思うが，既存の調査，色々な研究成果をまとめるだけでも良いので，基礎的な情報をきちんと精査したうえで，達成すべき指標を数値的に明確にしなければならない。

また、「気候変動に対して脆弱な種の保全」について書き込むべきではないか。気候変動に対してどの種が脆弱であるのか、また、それを重点的に守らなければならない。どういう異常気象が起きる可能性があって、どの場所が脆弱なのか、それが全然明らかになっていない。

農薬使用の削減に関しては、ポスト2020年目標に入りそうで、EUは既に目標に入れている。フランスは農業国で、非常に集約的な農業を行っている。農薬を使用していると、人間の健康だけでなく、生物の多様性も失われていくということで、農業政策として、強力な農薬の使用削減に取り組んでいる。その結果、昨年1年間で農薬の販売量が40%減っており、ほぼ半減している。農家の方も使わなくなったし、住宅地での農薬も基本的に禁止になっている。日本では住宅地で農薬を使用しているし、国際的に使用禁止になっている農薬がホームセンターで買えて誰でも庭で使える。こういう状態で生物多様性が保全できるわけがない。こういった状況も踏まえ、農薬使用の削減を考える必要がある。

公共調達においては生物多様性配慮が条件になっていない。市の調達において、少なくとも生物多様性に配慮したものしか買わないとなれば、事業者もがらりと変わる。給食の食材も生物多様性に配慮した有機農業の物しか使えないとすれば、かなり変わることが分かっている。

私は今のプランは方向性としては極めて正しいと思う。本当によく整理していただいている。もう少し数値的な目標を入れていただき、ここまでは絶対にやるというものにしていただきたい。となると、目標、リーディング事業辺りをもう少し厳密にしたほうが良いのではないか。そのためには予備的に必要な情報があって、京都の文化、事業、生物資源が何なのか、それで今どういう状況なのか、これが分からずには目標設定ができないのではないか。最初の1～2年掛けて、もう一度整理していただいたうえで、目標の再設定をするプロセスを入れたらどうか。最初の2年間に限っては、現状をしっかりと把握したうえで、リーディング事業を決めても遅くないのではないか。

森本委員 チマキザサの実態については明らかになっている。チマキザサはほとんどない。実際に花背のチマキザサのみで祇園祭は成り立たない。遠くから調達している。だから既に変わってしまっている。しかし、何とか地産地消で頑張ろうとプロジェクトをやっているが、非常に小さなプロジェクトで、消えかかっている。

湯本部会長 京都には多くの大学があり、研究が進んでいるので、その辺りの情報収集を行っているかなければならないと改めて思う。続いて、私からも提案がある。

これまでの生物多様性というのは、普通の人には、生物マニアの話、あるいは、絶滅危惧の動植物の話とあって、生物多様性という言葉は普及してきたが、依然として、生物多様性で連想するのは希少な動植物の話であって、私には関係ないという反応が残念ながらある。それに対し、次期プランは、虫嫌いや生きものに興味がないような人にとっても響くようなものでなければならない。「食」の観点から生きものと関係のない人はいないので、そういった視点が必要である。

京都の周りの自然をいかにいかしていくのか、管理をしながら自然の恵みを得ていくのかというところで、三つの案を考えた。京都の森、里、川の現場における生物多様

性保全を考えてみたらどうかという提案である。

森では、チマキザサなどの鹿の食害、あるいは、東山などでは倒木があり、防災・減災にも関わってくる問題がある。また、ナラ枯れも問題になっている。

里では、減農薬や有機農業の推進が必要である。外国では有機農業は普通だが、日本ではムーブメントになっていない。ミツバチが農薬で減っていることは事実であり、何とかしないと生態系サービスが明らかに低下しつつある。ムーブメントを作るためには、有機農業を真面目に考える必要がある。

川では、例えば、鴨川の天然アユの保全について、生物多様性の視点から積極的に取り組むのはどうか。

これらの取組は環境政策局だけでなく、産業振興等と連携しながら進めていく必要がある。京都の三山の森林再生、安心・安全をキーワードとした有機農業の拡大、天然アユなどの川の資源をきっかけとした水環境の見直しに取り組んではどうか。

また、行政の連携、基本的な事実確認、プランニングを行うとともに、グリーン調達、さらには、公共調達といった社会的な変容にもつながるような取組を考え、2050年の目標に進んでいく、というイメージでどうか。

足立委員、私の意見も踏まえ、次期プランの答申に向けて、皆様の御意見を頂きたい。

森本委員 第1章のプランの目指す方向性、特に「はじめに」のところに力強さを出すべきである。このプランでムーブメントを起こすという話でないと、感動的な諮問書への我々の答えにはならないのではないかと。新型コロナウイルス感染症は、社会を変えるきっかけになる。グリーンリカバリーという動きがあるが、ポストコロナ社会の生物多様性地域戦略では、生物多様性はあらゆる政策の基礎であるという位置付けでなければならない。何十年か前はニシンが獲れなくなって、今、ウナギも獲れなくなってきている。生物多様性の損失が進んでいるという状況を皆さんに発信していかなければならない。そうでなければ、いつの間にかサンマまで獲れなくなってしまう。

湯本部長 環境審議会でも政策に対して、ウィズコロナを強調したらどうかという意見があった。どれくらい記載するかは難しいところもあるが、是非考えていただきたいと思う。

森本委員 参考情報として、7月に閣議決定した「骨太の方針」でも、「東京一局集中型から多核連携型の国づくり」として地方創生の必要性が記載されている。国の方針としても、今後、地域の在り方を見直す必要があるという方向性は、生物多様性も同じである。

池本委員 ボランティア団体に所属していたことがあり、色々な依頼を受けて活動していたが、自然に関するボランティアの依頼は少なく、活動したくてもできなかったことがあった。人を集めることに関しては、SNSも大切だが、直接ボランティア団体に依頼することも良いのではないかと。

湯本部長 意思はあるけれど、つてがない、動き方が分からないという方もいらっしゃるの、そこに工夫を見い出すことも良いのではないかと。

石原委員 「ライフスタイルの転換」について、やはり「皆さん意識を変えましょう」といったところがあり、一人一人ができること、認識が足りないというところのウェイトが大きい、実は特に若い世代の学生はものすごく環境意識が高い。ただ、実際は自然に触れたことがないので、意識はあっても、どういう自然が良いのか分からない、具体

的に動こうとしても、どういうことができるのか分からないということがある。例えば、プラスチックごみが問題になっていることは認識が一気に広まっているが、コロナ禍において、外出自粛により自宅で過ごす時間が多くなったことで、テイクアウトでプラスチックごみを出さざるを得なくなり、結局、嫌だけれども、プラスチックごみが増えてしまう。そういうことは認識を変えてもどうしようもなく、社会のシステム自体が変わっていかなければならない。目標3で「ライフスタイルへの転換」を掲げているが、ライフスタイルというと、個人の生き方みたいところがある。もっと社会自体が変わらなければならない。そういう視点が弱いと感じる。社会の仕組みを変えていかないと産業自体が成り立っていかなくなる。そういう危機感を具体的に挙げつつ、社会変革を押していく必要があるのではないかな。

例えば、島根県の宍道湖では、最近、農薬由来でウナギが獲れなくなっているという研究成果も出ていて、農薬の削減に取り組むことで、水産業も利益を得て、消費者も利益を得ることにつながる。例えば、昆虫がたくさんいると、花粉を媒介して、受粉率が高まる。昔は、山から資源を取り出し、農作農地に落ち葉などをまいていたので、マツタケが大量に生育できていた。今より人が介入していたことで、マツタケも生えていた。そういう意味で、林業と農業と暮らしのつながりが消えている。それをどうやって再生していくのか。そこに関して研究者も一緒に考えていくことが大切ではないかな。

湯本部会長 コロナでいうと、リモートワークが随分進んでいるが、京都の農村部、田園地域が丁度よい所であり、リモートワークをしながら、半農半Xというライフスタイルも出てきている。それは生物多様性にも貢献するし、農業にも貢献する。ライフスタイルで何か考えていくのは難しいところではあるが、是非考えていただきたい。

落合委員 答申素案の内容は、道徳やモラルの範囲に訴えるものが強いのではないかな。どんなことが自分にできるか宣言するというのが考え方としてはあるが、あまりにも現実的ではないように思う。これは道徳やモラルの問題ではなく、生物多様性を守るというもっと実体のある問題だということをプランに入れ込む必要がある。また、高次のレベルの話と具体的な話が混在していて、読み手として受け取りにくいと感じる。

そこで、生物多様性を守らなければならない理由を三つまとめてみた。生物多様性を守るべき理由を三つ挙げると、①京都を含めて地球上に住んでいる生きものとして人が生き残るため、②経済活動が低下するため、③地域文化を継承できないため、だと考える。この三つの柱に基づき、プランの構成を組み替えても良いのではないかな。それによって道徳やモラル、人の気持ちに訴えるような政策ではなく、より具体的に農林水産業と直結し、波及効果が期待できるのではないかな。

板倉委員 身近な生活の視点からの意見として、私自身が大学時代から養蜂を行っているが、今年、温暖化の影響でダニが増えたと感じる。ミツバチにもダニが付着する。例年だと4月から5～6回、蜜が絞れるはずであったが、今年は絞れなかった。科学的根拠はないが、ミツバチがダニによって弱っている、あるいは、新しい農薬によって、迷子になるハチが増えて帰って来られない、ということがあるのではないかな。今までだと

スズメバチに攻撃されて、死体が落ちていたりするのだが、そうではない。個体数そのものが減少している。新しい農薬について、日本では規制が遅れている。ヨーロッパではネオニコチノイド系農薬は禁止されているが、農家の方は、この農薬は劇薬ではなく、検査をしてもトマトやナスビからは検出されない有能な農薬である、と言われる。養蜂を行っている立場から言うと、ネオニコチノイド系農薬の影響があるのではないかと考えている。

また、先日、鷹峯小学校で観察会を実施したが、昨年まで、学校のビオトープにウシガエルはいなかった。ところが今年は大きなウシガエルや大きなオタマジャクシが泳いでいた。アメリカザリガニもたくさんいた。どうやら地元の方が子どもたちのために色々な生物を持ち込まれたようだ。これにより、生態系が変わってしまい、シオカラトンボのヤゴが1匹確認されただけで、元々ビオトープにいたトンボやヤゴがいなくなってしまった。子供だけでなく、ボランティアに携わってくれる大人にも生物多様性の理解を促さないといけないと感じた。

湯本部長 京都市の生物多様性、農業を守るためには必要なことではあるけれど、国が許可している農薬を京都だけが禁止するのはハードルが高い。

森本委員 農薬について、ネオニコチノイド系のエビデンスは環境省でも明らかになっている。農薬の削減については、京都だけ使用の禁止ということは無理でも、低減を推奨することはできる。やり方次第で、意識の高い農家の方に取り組んでもらうことはできるのではないかと。

伏見委員 次期プランの策定に当たって、シンボルになる動物（トラ、ゾウ、アユモドキ等）を示し、これを守ることによって周辺の環境も守ることができ、親しみを持てるようなものがあれば良いと思った。

湯本部長 分かりやすいものが守られるのは当たり前のことであり、シンボル種のような希少種保全に偏った生物多様性保全からは脱却するべきである。それよりも、身の回りの自然、当たりの身近な生きものをいかに守っていくかが課題である。

伏見委員 京都府のレッドリストの本を持っているが、分かりにくい。例えば農林水産物について、資源量から見て食べられるかが分かるようなリストを作成してはどうか。その方が親しみやすく、一般の方にも分かりやすいのではないかと。

久山委員 全体の感想であるが、次期プランの答申素案の概要は両面でまとめられていて、すごく分かりやすい。ただ、改めて思うのは、一般の市民の方がプランを御覧になられた際、まだ分かりにくいと思う。生物多様性のために取り組まなければならないこととして、「生物多様性の持続可能な利用」、「生物多様性の保全・回復」、「ライフスタイルの転換」、「社会変革のための仕組み」の四つがあるということを2章まででしっかり示し、四つの項目を常に意識できる文章の流れにするべきではないかと。

また、アフターコロナ・ウィズコロナで社会変革の潮目にあると社会も感じている。そういう流れをうまく取り込んで、社会変革を成し遂げるメッセージを付けるべき。担い手の問題について、農林業でも担い手がいないと農林業も文化の継承も生物多様性も維持できないが、今のこういう局面だからこそ、今の若者は自然志向で、かつ雇用においても農業をやってみたいなど、今までと違うような発想が大きく表に出てき

ている。例えば「社会変革のための仕組み」の項目で、そういう若者に響くような言葉を記載する必要があるのではないか。

湯本部長がお示しされたリーディング事業（推進プロジェクト）の資料は非常にうまくまとめてあり、頭の整理ができた。森、川のつながりがなければ、生物多様性保全は絵空事にしかない。そのうえで、生物多様性を社会全体に被せたときに、例えば、川では、上流の生産者が多い地域と下流の消費者が多い地域では、捉え方が異なると思う。面的な広がりを意識し、行動指針を示すよう配慮すべきである。

湯本部長 社会変革について、重要な部分である。世の中がポストコロナで動くかもしれない。その際、グリーンリカバリーなど、ムーブメントになるように、生物多様性に配慮した新しい社会を作っていくという力強いメッセージが今必要である。

足立委員 地方に若者が移住していて、農業を担う事例が増えている。少し前から言われていたが、コロナで加速している。その時に基本になるのが、自然が豊かであることである。自然を「資本」として、いかに役に立つかということを強調すべきではないか。EUでは、生物多様性保全を拡げる際も、生物多様性は大切だから守るのではなく、新しい雇用を生み出すことができる、ビジネスになるということを説明する。だから動く。単に利便的に、モラル的に良いと言ってもなかなか魅力的に感じられない。

湯本部長 特に、第1章、第2章において、そういう内容を入れてほしいし、それを3章以降で受けることで、推進プロジェクトにつながっていくのではないかな。

足立委員 1章、2章のところで、気になるところを付け加えたい。5ページ目「京都市の生物多様性の現状と課題」に関して、フタバアオイやチマキザサの減少という記載では、人は動かない。マツ枯れやナラ枯れ、更にはコケや野草など、もっと身近なものが10年後なくなってしまう、悲惨な状況になってしまうという危機感をしっかりと訴える必要がある。

田中委員 プランが目指す方向性として、「知るから行動へ」とあるが、動物園で実際に来園者と接していて強く感じることは、まだまだ「生物多様性」は知られていない。知らせる努力は、これまで以上に行っていく必要があるのではないかな。特に4月以降、人が集まらないという状況になって、動物園でも人を集めて何かやるという術を失ってしまった。どういことを訴えれば、皆さんに響くのか、ということのを是非お知恵を拝借したいと思っている。逆に、この時期だからチャンスと考えていることとして、簡単なアンケート調査にも多くの人が集まって盛り上がる。真面目なことでも人々に興味を持ってもらえるチャンスがある。

落合委員 目標1の書き方が気になっている。「生物多様性の持続可能な利用」とあるが、違和感を覚える。「京都らしさを支える生物の持続可能な利用」が良いのではないかな。また、農業、食、ビジネス、文化の提示の仕方が弱いと感じるので工夫が必要ではないかな。茶道や華道、園芸、造園をされている方でも理解できるような書き方が必要ではないかな。

また、農業への新規参入について他産業から参入してくる大きなモチベーションの根源が有機農法や無農薬栽培である。それを個人で実現するためにサポートする会社が出てきている。「農地がある京都市」という側面も出していく必要があるのではない

か。完全な手付かずの自然と人間が介入した自然とのグラデーションがあることで、生物多様性があるという書き方が必要である。

森 本 委 員 京都の生物多様性について、何がどれだけ危機なのか分かっていない。情報収集とあるが、誰が何をするのか。生物多様性の現状を把握するための情報収集を進める具体的なプロジェクトが必要ではないか。残念ながら、京都には府にも市にも自然史博物館がない。エコロジーセンターや「さすてな京都」で何か取組ができないか。エシカル消費の推進は重要である。エシカル消費の促進のためには、まず情報提供が重要である。

もう一つは、建設事業において、京都で何か事業をするには、生物多様性の認証制度の取得が必要であるという仕組みを作ってはどうか。

また、何を大事にしていくかという方向性の所で、地方分散型の「地域循環共生圏」の構築を目標とするべきである。労働生産性より資源生産性が必要である。これは重要なキーワードである。サステナブルな経済を考えたときに、資源生産性が重要であり、これを推進する施策として、いわゆる環境税がある。これが、一つのキーワードになる。

湯本部会長 生物多様性の現状の把握に当たっては、大学の生物多様性コンソーシアムのようなものが必要なかもしれない。NPO等の生物多様性の実情を分かっておられる団体の方も集めてネットワークを構築できると良いと思う。

エシカル消費については、エコラベルも重要であるが、環境税など、生態系サービスへの支払いという考え方もある。

石 原 委 員 知見が十分足りていないので、具体的に書き込めないというのが実情だと思う。芦生では、美山町にある国定公園内のビジターセンターと研究者が連携して、研究者が蓄積したものをデータベース化する取組をしている。お金を掛けず、新しい箱を作る、お金を掛けずに、情報をできるだけ集める。これは研究者にとってもプラスであるし、現場を把握する地域の人にとってもプラスになるものを構築しようとしている。第3章で「社会変革に向けた仕組み」の2050年までに達成すべきことが記載されているが、これは私にとっては「ライフスタイルの変換」に近いところではないかと思う。「社会変革に向けた仕組み」では、「ライフスタイルの変換」を進めるためにどのような仕組み作りをしていくかということを記載しなければならないのではないかと。2030年の目標はしっかり書かれているが、2050年の目標ではそこがずれてしまっているように思う。

また、市民調査（シチズン・サイエンス）は大変有効である。環境に興味がある人だけではなく、趣味で登山や釣りをする人に協力してもらうことで、生物調査をする取組を我々も行っている。入口として関心のない人たちにうまく働き掛けて情報を得つつ、そこまで環境や生きものに興味のない人にも入りやすい入口を作っていくことで、エコツーリズムにつながる可能性があるのではないかと。

また、2030年度までの目標に「地球温暖化を緩和する」とあるが、施策のところには何も記載がない。他の部署とも連携して進めなければならないところではないか。

伏 見 委 員 社会変革に向けた仕組みについて、先ほど、モラルに訴えるだけでは駄目、との御意

見があったが、市内中心部では、町家がどんどん取り壊され、市街地の緑が守られていない印象がある。個人の財産であり規制は難しいのかもしれないが、少なくとも喪失したものを努力レベルで補うような制度があれば良いと考える。

久山委員 サステナブルツーリズムの推進について、京都は新たなツーリズムを創出しなければ、時代も乗り越えられないし、文化も継承できないと思う。ある資源を我々が活用して提示することでもあり、必要なことである。エコツーリズムにより、農業体験等に加えて、川上と川下の人々をつなぐことも期待できることから、ここはしっかりと具体的に書く必要がある。また、農業を体験するだけでなく、もっと森に入ってもらうために、例えば、京都1周トレイルを利用するなど、森林空間をもっと利用するという提案があっても良いと思う。

池本委員 街中でも鴨川に集まっている人は結構多い。その人たちにライフスタイルの転換を図っていったら良いのではないかな。

また、学校教育において、環境は特別な授業でしかなく、授業時間も少ないと思う。そこも変えていく必要があるのかなと感じた。

田中委員 施策に関して、動物園としてどう関わられるかという視点で見ると、目標3に「生物多様性の学びの拠点の充実」とあるが、他には、京都に関係のない生物の域外保全くらいしかない。動物園で生物多様性の観点から何ができるか、もう少し具体的なものがないと分からない。先ほども発言したとおり、コロナ禍で動物園でも従来通りの事業が全く実施できていない。新しいやり方を考えないと出遅れてしまうと感じている。

板倉委員 重点保全地域の取組について、深泥池や八丁平、大原野森林公園が記載されているが、市民の多くは、八丁平や大原野森林公園についてどういった場所か知らないのではないか。もっと市民に知ってもらうために、実際に見に行ってもらうような取組から始めるべきである。

足立委員 本プランでは「覚悟」が問われている。このまま放置すれば10年後は現状より悪くなることは明らかである。ここで示されている取組をすればマイナス100をマイナス90くらいにはできるかもしれないが、まだまだ弱い。劣化をどこまで食い止めるか。できればマイナス100をゼロにしたい。それだけでなく、プラスに転じるために、何をやるということを考えなくてはならない。

目標1の「生物多様性の利用」の言い換えについては、「多様な生物の利用」としても良いのではないかな。

目標2の達成項目について、「多様な動植物が見られる重要な生息・生育地の環境を改善する」とあるが、どこまで改善するのか。重要な生息・生育地の環境は100%守られてないといけない。「種の絶滅を食い止める」という項目も、このまま放っておけば、京都府下では、10年間で絶滅するということはあると思うが、これを見過ごすのか。絶滅種はゼロにしないでほしい。「侵略的外来種の侵入・拡大を抑制し、生態系や人の健康、農林業への被害を防止する」という項目についても、抑制で良いのか。侵略的外来種による被害を完全に止めなければならない。そこを目指さないとどんどん悪くなっていくのではないかと懸念している。したがって、目標2に関してはかなり深刻に捉えて、真剣に数値目標を作りたい。

エコツーリズムの推進については、10年後、エコツーリズムができる環境があるのか。「竹林景観を対象とした～」とあるが、何も手を打たなければ、竹林はますますボロボロになる。そこでエコツーリズムをすることであっても、誰も楽しめない。自然をただ見るのではなく、観光を完全にサステナブルにしなければならない。最近では、アムステルダムにおいて、今のようなツーリズムをやっていると観光者がパンクするため、自然をただ見るのではなく、観光を完全にサステナブルにしようという動きがある。写真を撮っておしまいではなく、現地の人たちと一緒に時間を楽しむというものである。京都で一緒に時間を楽しむというのは何なのか、それは文化等になると思うが、そこで自然の良さがなければならない。竹も笹もなかったら楽しめない。これをやれば、サステナブルツーリズム、エコツーリズムができるということを考えていかなければならない。そういう意味では、1次産業が重要であり、目標2がすぐ関わってくる。持続可能な一次産業、有機農業の推進によって、どう生息地の保全をしていくか、ぜひ具体的な施策として書き込んでいかなければならない。八丁平や深泥池の保全も重要であるが、市の予算の範囲内での保全では、マイナス100をゼロにはできないので、事業者の協力が必要である。

プラスチックごみに関して、「プラスチック代替製品の利用促進」とあるが、京都では「ペットボトル全廃」を目指しても良いのではないか。日本ではないが、世界では全廃している国はある。

目標3の取組にある「京都生きもの検定」もあって悪くはないが、ここはリソースをたくさん入れ込むところではない。ここは、NGOや教育機関で頑張っていたきたいところだが、それだけに頼ってしまうと本質的には変わらない。「京都生きもの検定」をやることによって、生物多様性保全に少し役に立ちましたということで、私たちは満足してはいけない。

目標4の施策「生物多様性に配慮した企業活動の促進」に関しても、これでは、企業は動かない。何のメリットもないので、見向きもしてくれない。では何をすれば良いかというと、先程述べた公共調達である。京都市の調達においては、生物多様性に配慮しなければ購入しないということにする。また、公共事業にも、気候変動にも資するグリーンインフラを入れる。これまでと同じ予算で、グリーンインフラにしてください、とすれば良いことである。あとは、開発においてはオフセットにする。これらは市が要求すれば変えられることなので、是非入れていただきたい。

「ICTを活用した情報の収集、発信」では、市内にアプリを活用しているベンチャー企業が既にあるので、これら民間の力を活用すれば投資はゼロで済むのではないか。プラン全体に関しては読み込めてないので、もうちょっと時間をいただいて、その後意見を述べたい。

議題(3) 次期プランの評価方法について

事務局 <資料3に基づき説明>

森本委員 危機の現状が正確に把握されていない中、評価をするのは困難である。特に目標2に関しては、専門家や現場を良く知っている人による評価組織のようなものを作り、客観的に評価してはどうか。現状把握するというところに、予算を掛け、真面目に取り組

む必要がる。

足立委員 評価指標のところでは、「京都の文化を支える生物資源を持続的に利用する」の指標例として、チマキザサの生産面積がある。これが２倍になれば大成功のようにも見えるが、これだけでは祇園祭での利用量を賄えているかは評価ができない。そこまでいかなければ持続可能とは言えない。現在の指標案は、増加させることに意味はあるが、持続可能性を評価できるものではないと感じる。